

実証研究プロジェクト L

読みに困難のある児童の通常の学級での デジタル教科書・教材の活用

L.1 実証研究のテーマ

2002年に文部科学省が実施した「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査」⁶によると、通常学級に在籍し、知的発達に遅れはないものの、読み書きなどの学習面か行動面かで著しい困難を示すと担任の先生が回答した子どもの割合は、6.3%に達する。これは、国内の小中学生約1,000万人から推計すると63万人、40人学級には各学級に2.5人ずつこのような困難を示す子どもが在籍していることになる数字である。これらの困難がある子どもは、目が見えない、車椅子を利用しているといった意識されやすい身体的障害ではないが、学習障害(LD=Learning Disability)、注意欠陥/多動性障害(ADHD=Attention Deficit / Hyperactivity Disorder)といった障害がある可能性があり、障害に応じた配慮や支援がされるべきであり、どのような配慮や支援を行うべきかは、対象の子どもの人数の多さからも、多くの教育関係者にとって重要な課題である。

近年、これらの子どもの学習に、デジタル教科書・教材が有効な支援になることを検証する研究が行われてきている。

本実証研究は、通常学級に在籍する学習に困難のある子どもを対象に、本人が在籍する通常学級におけるデジタル教科書・教材を利用しての学習効果について検証する。これに対し、通常学級に在籍する学習面や行動面で困難のある子どもを対象に、通級指導教室で実施する個別指導におけるデジタル教科書・教材の活用については、実証研究プロジェクトMで検証している。

L.2 実証研究の概要

L.2.1 狙いと特徴

本実証研究では、通常学級に在籍する学習に困難のある子どもを対象に、本人が在籍する通常学級におけるデジタル教科書・教材を利用しての学習効果について検証する。障害がある子どもを対象にしたデジタル教科書・教材を用いた実証研究はこれまでもいくつか行われているが、本実証研究は下記の2点について、特徴的な実証

⁶ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301i.htm

研究となっている。

(1) 通常学級での実施

障害がある子どもを対象にした実証研究は、特別支援学校や特別支援学級で実施されることが多いが、本実証研究は通常学級にも多く在籍する学習に困難のある子どもを対象にしたもので、実証研究も在籍する通常学級で行った。通常学級ということで、学習を行う上で特に困難を感じていない子どもが多い中、学習に困難を感じている子どもだけが情報端末を使って授業に参加するという形式をとったため、その点において、一般の通常学級でも大いに参考にしていただける実証研究であると思われる。

(2) 試験のデジタル化と情報端末の使用

授業だけでなく、学校で実施する試験においても、試験問題をデジタル化し、子どもが情報端末を用いて試験に取り組んだ。通常の学習において情報端末を用いて学習効果があがっても、試験の際に情報端末を使用できないことで学習効果が適切にはかれないことは非常に残念であるため、学習効果を正しくはかることができるよう、今回の対象児は情報端末を用いデジタル化された試験に取り組んだ。

L.2.2 実証研究環境

- 実証研究場所： 奈良県香芝市立の小学校および家庭
市内他校にある通級指導教室
- 研究実施教員： 在籍学級担任、校長、他校の通級指導担任により実施
- 研究方法： 教育実践支援、研究授業観察、研究協議、およびインタビュー
- 参加企業： 日本マイクロソフト株式会社
- 研究期間： 2011年8月1日～2012年3月31日
- 研究対象科目： 国語、社会科
- 技術支援、研究授業観察： 特定非営利活動法人支援技術開発機構

L.2.3 実証研究対象児

実証研究校に在籍する小学校5年生の子ども 2名

L.2.4 使用したハードウェア、ソフトウェア

対象児が使用したハードウェア	Lenovo ThinkPad T410s/T410si マルチタッチディスプレイ付き
OS	Windows 7 Professional

L: 読みに困難のある児童の通常の学級でのデジタル教科書・教材の活用

コンテンツ仕様	通常の教科書(文部科学省検定済教科書)をデジタル化した教科書とデジタル教材
再生ソフトウェア	DAISY Consortium AMIS 3.13 日本語版、 Dolphin EasyReader 6.02 日本語版

教室内では指導者用情報端末、プロジェクター、スクリーンも使用

L.2.5 使用したデジタル教科書・教材の詳細

教科書	公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会が障害のある児童・生徒のために提供しているマルチメディア版 DAISY教科書 ⁷ の国語 光村書店 小学校5年生 および 社会科 東京書籍 小学校5年生 DAISY2.02 日本語拡張仕様でデジタル化されており、専用の再生ソフトウェアを使用することで、文章の読み上げ、読み上げている文章のハイライト表示が行われ、画面の拡大、読み上げ速度の変更、画面や文字の色の変更等が画面にタッチしたりマウスを使うことで自由に行える
教材	学級担任が作成した社会科(日本の農業・工業を学ぶ)の教材を教科書と同じ仕様でデジタル化したもの
試験問題	国語、社会科の単元テストをデジタル化したもの 教科書と同じ仕様で、教科書の引用文、問題文などを読み上げさせることができ、読み上げている文章のハイライト表示も行われ、速度の変更などの調整も使用者が自由に行うことができる

⁷ <http://www.dinf.ne.jp/doc/daisy/book/daisytext.html>

L.3 授業案

実証期間中の授業の 1 時限分の授業案を添付する。「DAISY」とあるのは、デジタル教科書・教材を指している。

第5学年 国語科学習指導案			
～DAISYを活用して、みんなで一緒に音読しようよ～			
2012年3月8日(木)		第5校時	
5年X組	28名(男子12名 女子16名)		
		指導者	EM
		学習場所	自教室
1. 題材名 今も昔も 枕草子(光村図書 国語五年 銀河)			
2. 単元の目標			
○古典の文章を音読し、言葉の響きやリズムを味わうとともに、文章の内容の大体を知る。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)			
○昔の人のものの見方や感じ方について知る。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)			
3. 単元の評価規準			
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項			
<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の響きやリズムを味わいながら音読をしている。(ア) ・文章の内容の大体を理解している。(イ) ・昔の人のものの見方や感じ方について自分なりの意見を持っている。(ウ) 			
4. 指導計画(全1時間)			
次	時間	学習活動	評価規準と評価方法
第 一 次	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「枕草子」(第一段)春夏部分を、DAISYを用いて音読する。 ・口語文と照らし合わせながら読み、大体の内容を知る。 ・昔の人のものの見方や感じ方について知り、自分なりの意見を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ア【観察】 イ【発言・ワークシート】 ウ【発言・ワークシート】

L: 読みに困難のある児童の通常の学級でのデジタル教科書・教材の活用

<p>5. 本時の計画</p> <p>目標：・言葉の響きやリズムを味わいながら音読することができる。</p> <p>・文章の内容の大体を理解することができる。</p> <p>・昔の人のものの見方や感じ方について自分なりの意見を持つことができる。</p> <p>本時の展開</p>			
<p>学習活動</p>	<p>配慮を要する児童への支援</p>	<p>学習上の支援</p>	<p>評価規準と評価の方法</p>
<p>・自分の好きな季節とその理由を発表する。</p> <p>・本時のめあてを知る。</p>	<p>・個人用パソコンの準備</p> <p>・プリントはクラス全体と同じものを配布。</p>	<p>・自由に意見を出させる。</p>	イ
<p>千年前を生きた人の、季節の感じ方についての文章を読もう。</p>			
<p>・文章の音読をする。</p> <p>範読 一斉読み</p> <p>・口語訳を読む。</p> <p>・清少納言がそれぞれの季節で「をかし」と思ったものを知る。</p>	<p>・電子黒板ユニットの画面に注目させる。</p> <p>★口語訳の画面を見ながら読む。</p>	<p>☆範読</p> <p>☆一斉読み (音量を変えながら)</p> <p>・歴史的仮名遣いの読み方をおさえながら読ませる。</p>	
<p>「をかし=よいと思うもの」を書き留めた文章であることに気づく。</p>			
<p>・文章の音読練習をする。</p> <p>ペア読み 個人読み</p> <p>・全員で音読する。</p> <p>・感想を書き、発表する。</p>	<p>★個人読み</p> <p>★パソコン画面を見ながら読んでもいいし、教科書を見ながら読んでもいいことを伝える。</p>	<p>・ペアで、仮名遣いの読み方や音の響きを確認させる。</p> <p>・必要に応じて DAISY の画面を使用する。</p> <p>・清少納言の気持ちを想像しながら読むように声かけをする。</p> <p>・昔の人の感じ方と今の自分の感じ方との相違点に着目して感想を書かせる。</p>	<p>ア</p> <p>ウ</p>
<p>☆…電子黒板ユニットを利用した DAISY の使用</p> <p>★…対象児童が個人用パソコンを利用した DAISY の使用</p>			

L.4 授業の様子

L.4.1 対象児のプロフィール

対象児のうち、1名(以下A君)は1年生より通級に通学し、3年生よりデジタル教科書を使用。もう1名(B君)は5年生になって学習のつまずきが顕著になりデジタル教科書の使用を開始した。

A 君、B 君の学習における困難の状況と、デジタル教科書・教材の使用状況の変遷は下記のとおり。

1 年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ A 君、1 学期終了後ひらがなが覚えられないことから、週 1 時間の読み書きを中心に通級指導を開始
2 年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ A 君、引き続き、週 1 時間の通級で読み書き指導
3 年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ A 君、引き続き、週 1 時間の通級で読み書き指導が行われたが、2 学年以上の遅れがみられた。 ・ 3 年生の 3 学期に通級で国語の教科書に掲載されている「三年とうげ」のデジタル版(音声での読み上げがされ、読み上げているところがハイライト表示される)を読み(聞き)、良好な反応。紙の教科書を見ての学習より音声で聞くほうが内容が理解できているようにみられた。 ・ 3 年生の終わりには、学習に対して意欲的になり、自己肯定の発言が出てきた。授業中に席を立つことがなくなった。 ・ 専門機関により発達性読み書き障害と診断。
4 年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係者で協議し、A 君は「聞けば理解できる」という場面が多いため、通常の授業で一名だけデジタル教科書を使ってみることを決定。 ・ 手元に情報端末を置き、日本障害者リハビリテーション協会が提供するデジタル教科書を情報端末で使用し授業に参加。 ・ 試験について、これまで先生が試験中の巡回時に問題文を読み上げて支援することがあったため、A 君の得意な理科の試験問題をデジタル化して情報端末を使用しての試験を実施。問題文を読み上げれば、ほぼ平均点の内容理解を示すことが確認された。
5 年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ クラス替えで A 君と同じクラスになった学習につまずきがある B 君に A 君がデジタル教科書を紹介し、B 君も使用を希望。教室内で 2 名が情報端末を用いてデジタル教科書を使用して授業を受けることになった。A 君、B 君ともに国語と算数の試験もデジタル化されたもので試験を受ける。 ・ 2 学期より社会科についてもデジタル化された試験を実施。教材についてもデジタル化されたオリジナル教材を使用し学習。

L.4.2 授業の様子

A 君、B 君は自分の机の横にもう一つ机が用意され、その上に情報端末を置き、デジタル教科書・教材を見ることができるようになっている。通常の紙の教科書も用意しているが、授業中はほとんど確認することはない。デジタル教科書の音声を聞く際には、他の子ども達の妨げにならないように、ヘッドフォンを通して音声を聞く。今回使用したデジタル教科書には、教科書の読みたい場所に素早く移動するためのナビゲーション

L: 読みに困難のある児童の通常の学級でのデジタル教科書・教材の活用

機能がある。この機能により、段落や見出しへの移動(ジャンプ)の他、目次からの移動、紙の教科書のページ番号での移動も可能なので、紙の教科書を用いている子ども達と比較して、読むべき場所への移動の所要時間にも遜色はなく、授業に参加できている。

ソフトウェアの起動、教科書の表示、読むべき場所へのジャンプ、音量の調整などの操作はマウスで行う。

A君、B君のみだけでなく、学級全体でデジタル教科書・教材を活用することもある。具体的には授業は下記のように行われた。指導案からの抜粋を含めて詳細を示す。



デジタル教科書をインストールした情報端末の画面を黒板上のスクリーンに投影させ、先生が情報端末を操作し、学級全体でデジタル教科書の範読を聞く。

読み上げられているところがハイライト表示される。



同じくスクリーン上のデジタル教科書を見ながら、デジタル教科書の読み上げにあわせて、学級全体で音読を行う。



子どもの希望にあわせて、スピードや音量を調整し、音読を繰り返す。



先生から教科書の内容についての質問を行う。



質問に回答するために教科書の内容を確認する際に、A君、B君は手元の情報端末でデジタル教科書を音声聞いて確認する。

その他の子どもは紙の教科書を読んで確認する。

デジタル教科書を使う全ての場合において、情報端末やスクリーン上のデジタル教科書を見るか紙の教科書を見るかは

子どもが選ぶことになっており、先生からはどちらかを選ぶように声をかける。



質問の回答を記入する場合は、A 君、B 君を含め、
全ての子どもがプリントに鉛筆で記入する。

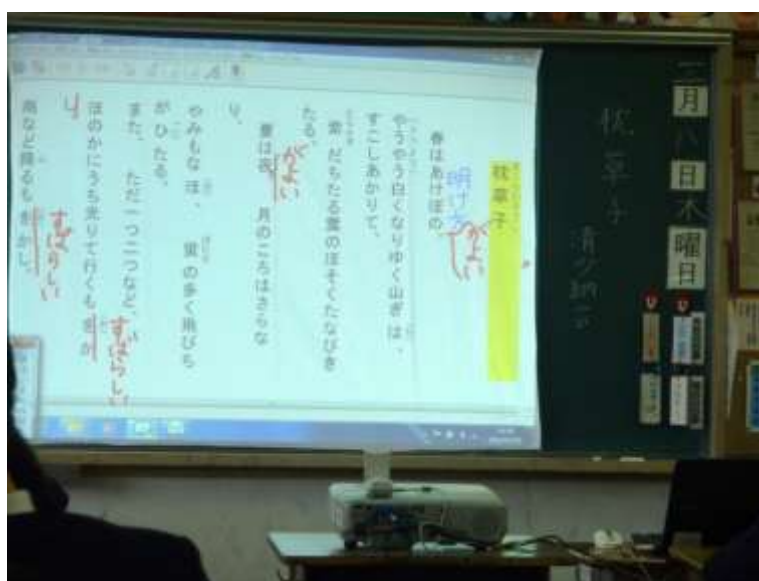
L.4.3 教室でデジタル教科書・教材を使うための工夫

今回の実証研究の大きな特徴として、通常学級で少数の子どもだけが、情報端末を使って授業を受けているという点が挙げられる。情報端末を使った学習の効果がありそうな子どもがいるが、通常学級で一人だけ情報端末を使用させることが困難だと考える教育関係者が多い。しかし、今回の実証研究実施校では、授業中に A 君だけに情報端末を使用させることを決定した際に、学級担任を中心に通級指導教室担当の先生、学年担当の先生、校長等が協議して、

- ・ A 君にとって情報端末の使用が必要であることをクラスメートが自然に知る
- ・ デジタル教科書・教材は特別なものではなく、必要な人は誰でも使えるものであることを知らせる

という目標を設定して、朝の読書の時間に電子黒板にデジタル教科書を提示して学級全体で使用したり、子どもが自由にデジタル教科書・教材を試すことができるコーナーを教室内に設けるという工夫を行った。さらに、誰にでも苦手なことがあることをクラス内で話し合ったうえで、デジタル教科書の専門家が、世界中の読みが困難な子どもがデジタル教科書・教材と情報端末を使用していることを授業内で話す機会を設けたりした。

この結果、読みが苦手な A 君がデジタル教科書と情報端末を使って授業に参加するのは「当たり前」という雰囲気が学級内に作られた。



A君が学級内で1名だけ授業中に情報端末を使用することが問題なく行われていたことが、クラス替えで同じクラスになったB君が読みに苦労しているのを知った際に、A君がB君にデジタル教科書での学習を紹介することにつながったと考えられる。

L.4.4 試験

通常の学習においてデジタル教科書・教材と情報端末を用いて学習効果があがっても、試験の際に情報端末を使用できないことで学習効果が適切にはかれないことは非常に残念なことである。今回の実証研究では、学習効果を正しくはかることができるよう、単元ごとの試験についてもデジタル化をし、対象児は情報端末を用いて試験に取り組んだ。これは、試験中に先生が巡回する際、A君が問題文の読みにつまづいていると、小さな声で問題文を読み上げて支援することがあったため、対象児が自分のペースで、いつでも読みたいときに読みたい場所を読めるようにさせたいということから開始された。

今回デジタル化する試験の科目は、比較的長文の出題があり、問題文を読めないことが大きな障壁となると思われる国語と社会科とした。

試験問題を読み上げさせるための情報端末の操作は、デジタル化された教科書を読む際と同じ再生用ソフトウェアを用いたため、基本的に同じであった。試験問題の最初から最後まで連続して読み上げさせることもできるし、読ませたい部分を選んで読み上げさせることもできる。読み上げている部分のテキストは常にハイライト表示される。

試験は通常通り教室で他の子どもと一緒に行われ、他の子どもが紙の試験に取り組む中、A君、B君は情報端末でデジタル化された試験問題を開き、マウスを使って音声再生させ、ヘッドフォンで聞いた。試験の開始、終了は他の子どもと同時で、時間の延長は行わなかった。試験の回答は、他の子どもと同じように試験の紙に鉛筆で回答を記入していった。A君、B君とも、回答がわかっているにもかかわらず書き表すことにも困難があると思われる部分もあり、書字の困難への支援は今後の課題である。しかし後述するように、デジタル化された試験を情報端末を用いて受けた場合の効果は明らかであった。

L.5 プロジェクトの評価と課題

L.5.1 デジタル教科書・教材を使用した学習の成果

デジタル教科書・教材を情報端末を用いて学習したことによる学習効果を下記に示す。

- 1) 学級で見られた成果
 - ・ 授業に対する意欲が上がった (A君、B君)

- ・ 試験に一人で取り組めるようになった (A 君、B 君)
- ・ 音読の際に、つかえずに読めることが増えた (A 君、B 君)
- ・ 「読もう」とする姿勢が見られるようになり、自分で学級文庫にある本を借りるようになった (A 君)
- ・ 研究授業の際に自ら挙手をし、教科書の音読を行った (B 君)

2) 家庭での効果

- ・ 以前は母親に読みを助けてもらわないと学習が進まなかったが、デジタル教科書・教材を用いて一人で学習ができるようになった。(A 君)
- ・ 一人で学習できるようになったことで、ストレスによる母子の軋轢が減った。(A 君)

3) 試験結果

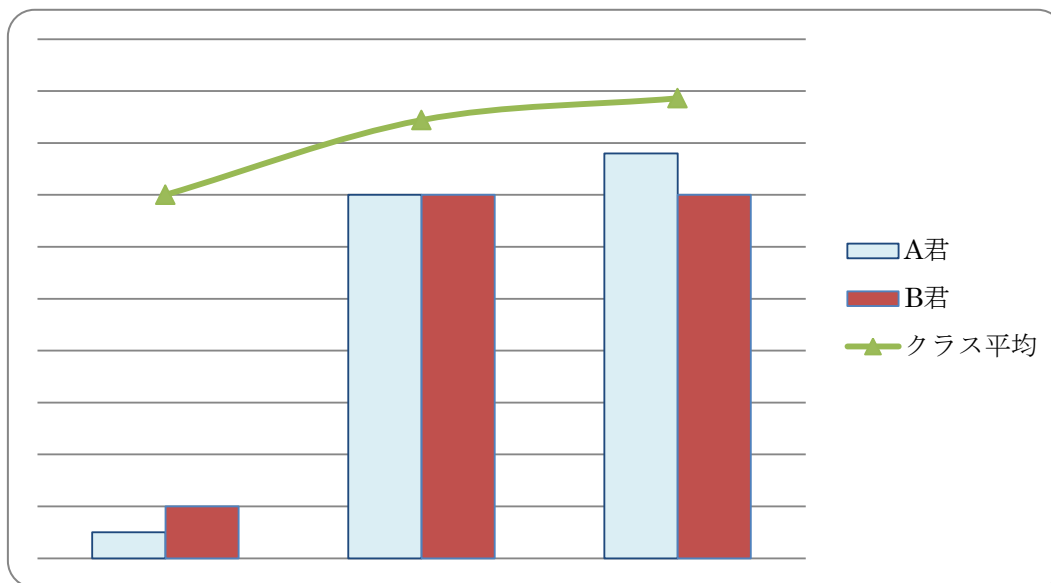
- ・ 表 1 に A 君と B 君の社会科の試験の点数とクラス平均を示す。5 月 16 日実施の試験は A 君、B 君ともに紙で出題され、それ以後はデジタル化された試験に取り組んだ。5 月の試験では、クラスの平均点が 70 点だった試験で、A 君、B の得点はそれぞれ 5 点と 10 点だった。
- ・ 9 月と 11 月の試験は、本実証研究の取り組みとして、任意の場所を音声で読み上げさせることができるデジタル化された試験に取り組み、回答は紙の試験問題の回答欄に鉛筆で記入した。その結果、得点はクラス平均の約 80%に飛躍した。

実施日	A 君	B 君	クラス平均	平均点との差	
				A 君	B 君
5 月 16 日	5	10	70.0	-65	-60
9 月 30 日	★ 70	★ 70	84.4	-14.4	-14.4
11 月 22 日	★ 78	★ 70	88.6	-10.6	-18.6

表 1 社会科試験得点

★・・・デジタル化された試験を実施

- ・ グラフ 1 に平均点を折れ線、A 君、B 君の得点を棒グラフで示す。二人の得点が十数倍(A 君)および数倍(B 君)にそれぞれ飛躍的に増加し、平均点に大きく近づいたことが明瞭に示されている。学級担任および通級指導担当の先生は、「紙の試験では問題文を読んで理解することができなかったために、学習の成果として身につけていた知識を示すことができなかったが、情報端末を使ってデジタル化された試験問題を読むことで、他の子どもと同じ教室で同じ時間内に平均点に近い学習の成果を示すことができた」と分析する。



グラフ 1 社会科試験得点

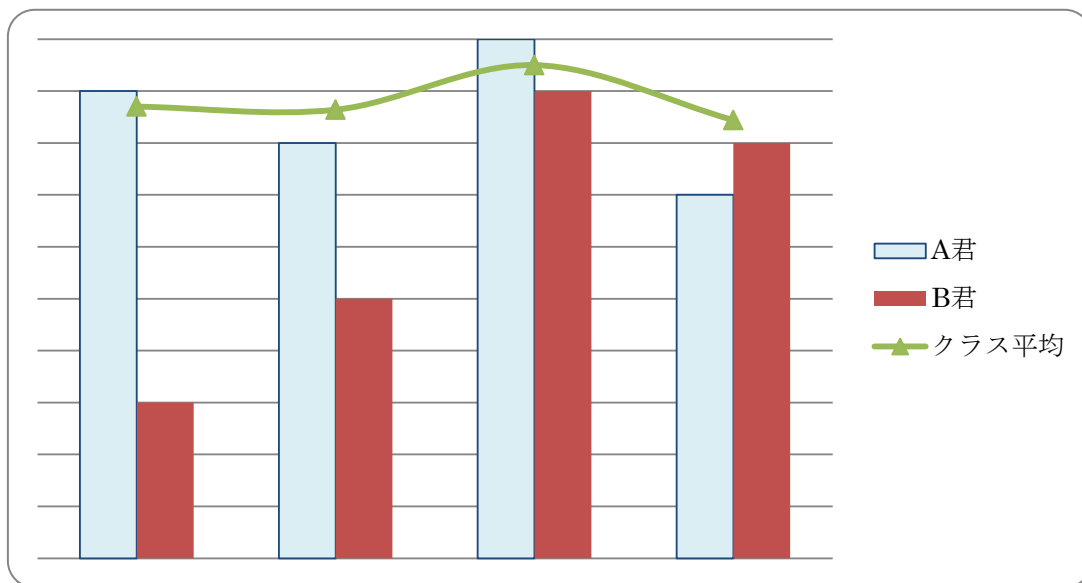
- 表 2 およびグラフ 2 に A 君、B 君の国語の試験の得点とクラスの平均点を示す。社会科と同様に平均点を折れ線グラフ、A 君、B 君の得点を棒グラフで示す。

実施日	A 君	B 君	クラス平均	平均点との差	
				A 君	B 君
5 月 24 日	★ 90	30	87.0	+ 3	-57.0
6 月 22 日	★ 80	★ 50	86.4	-6.4	-36.4
2 月 3 日	★ 100	★ 90	95.0	+ 5	- 5
2 月 27 日	★ 70	★ 80	84.4	-14.4	-4.4

表 2 国語試験得点

★・・・デジタル化された試験を実施

- A 君は 5 月以後のすべての試験をデジタル化された試験で実施した。その結果、4 回の試験のうち 2 回は平均点以上の得点を得ている。2 月 27 日の試験は A 君はクラス平均の 83%の得点となったが、1 年間の学習のまとめとして初めて見る文章による出題だったためと思われる。
- B 君は 5 月 24 日の試験は紙の問題で受験し、6 月 22 日以後はデジタル化された試験で実施した。B 君は紙の問題を使った 5 月 24 日の試験ではクラスの平均点の 34%の得点であったが、デジタル化された最初の試験ではそれが 60%に向上し、その後の 2 回の試験では、ほぼクラスの平均点を取得している。
- A 君、B 君ともに、試験による学力評価が得られることで学習意欲のさらなる向上につながり、良い循環を起こすことができた。



グラフ 2 国語試験得点



L.5.2 課題

□教科書のデジタルデータの提供の課題

本実証研究で使用した日本障害者リハビリテーション協会が提供しているマルチメディア版 DAISY 教科書は、通常の紙の教科書(検定済教科書)がデジタル化され、専用のソフトウェアで再生することで、音声で読み上げを行ったり読み上げている部分をハイライト表示させることができるもので、読むことや視覚に障害があるなど紙の教科書

の使用が難しい子どもが申請をすることで提供を受けられる。⁸

しかしこの教科書は、文部科学省から提供された教科書の PDF データを使ってボランティアによって製作され、個人で協会に申込みをして提供を受けるもので、通常の紙の教科書が教科書会社によって製作され公費によって買い上げられ学校から子どもに提供されているのと、製作・提供方法が異なっており、入手に手間がかかり、存在自体を知らない先生や父兄も多い。

その他にも、

- ・ ボランティアによる製作ということもあり、供給が約束されていない（年度初めに教科書が用意できていないこともある）
- ・ デジタル教科書の品質に差があることがある
- ・ CD の送付を希望する場合は費用がかかる⁹
- ・ サーバーからのダウンロードは無償だが、学校でインターネットの利用が制限されていたり、ダウンロードしたデータの利用が認められていない場合も多い
- ・ デジタル教科書のコピーや改変は禁止されており、入手したデジタル教科書の内容を引用したデジタル教材を作成することはできない

などの課題がある。

視覚に障害のある人、視覚や認知に障害はないが読むことに困難のある人（ディスレクシア）、上肢に障害があり本を持ったりページをめくることが難しい人など、紙の印刷物を読むことに困難のある人々は「Print Disability」と呼ばれ、電子出版の拡がりにより、これらの人々が恩恵を受けられることが期待されている。学習においても、「Print Disability」の子どもたちは多く存在し、その子どもたちにとって、デジタル教科書・教材は有効な学習手段になると言われており、本実証研究でもその効果が認められた。

多数存在している学習に困難のある子どもの学習が進むように、適切なデジタル教科書・教材や教科書のデジタルデータの提供が行われるべきであると考ええる。

□試験での課題

学習をする上で何らかの困難があり、通常の学習は情報端末を使って行っている人も、入学試験をはじめとする試験では、情報端末の利用が認められることは非常に少ない。例えば上肢に障害があり鉛筆での筆記に時間がかかるため、普段は自分にあった機器を使い情報端末に文字を入力して学習をしているのに、試験のときだけ情報端末の利用が認められずに時間がかかる鉛筆での筆記で試験を受けるのでは、能力

⁸ 2008年9月より提供が開始され、2012年2月現在、1100人を超える登録利用者がいる。

⁹ 日本障害者リハビリテーション協会が提供するマルチメディア版 DAISY 教科書の場合、CD の郵送は平成 24 年度から生徒 1 名 1 教科につき 2,000 円。

通りの試験結果を得ることができず、深刻な問題である。

本実証研究では单元ごとに行う試験についてもデジタル化を行い、大きな効果が認められた。試験で情報端末を使用する際に危惧されることを補うツールも開発されてきている。¹⁰ 日常の学習でパソコン等情報端末を使って成果をあげている子どもが、入学試験をはじめとする試験でも情報端末の利用が認められるように、柔軟な措置が行われるべきである。

L.5.3 プロジェクトの評価

L.5.1 で見たように、デジタル教科書を使用した学習により、学習効果が上がることが実証された。特に、今回デジタル化された試験を実施したことで、数値的実証がされたことは大きな成果であると考え。L.5.2 で挙げたように、試験で正しく能力がはかれることは非常に重要なことである。今回の対象児が、試験による学力評価が得られたことで学習意欲がさらに向上し、良い循環を起こすことができたことから、早急に対処されるべき課題であると考え。

また、今回の実証研究の特徴として挙げた、通常の教室で学習に困難のある子どもだけがデジタル教科書と情報端末を用いて授業に参加しているケースは、通常の学校現場では認められにくいことである。“一人だけ違う”ことによる偏見や羨望、それによるいじめが危惧されているためと思われるが、今回の実証研究校は、工夫をし、良好な学級運営を行っていた。通常学級に学習に困難のある子どもが多く在籍する中、ぜひ参考にしていただきたい事例であると考え。

¹⁰ 「学習における合理的配慮アライアンス」 試験で利用できるツール
<http://www.doit-japan.org/accommodation/tool/index.html>